
論文

老大木に関する研究 (Ⅶ)

—— 匍匐するダイセンキャラボクについて ——

小笠原隆三*

A Study on Large-size, Aged Tree (Ⅶ)

—— On the Creeping Daisenkyaraboku (*Taxus cuspidata* var. *nana*) ——

Ryuzo OGASAWARA *

Summary

In the old trees of *Taxus cuspidata* var. *nana*, there are many trees of which the stems and branches are creeping, branching, forming the roots in some parts, and continue to grow on the ground surface and under the ground. In those trees, there are some of which the main stems withered already, but on the tip parts the branches, stems, leaves, and roots develop and continue to grow. In these cases, those tip parts should not be recognized as those of same individual of the older main stem which withered, but the trees should be recognized as other new individuals, and the tree age must be decided upon the age of tip parts without relation to the withered main stem.

I 緒 言

樹木の幹の成長は反方向地性をもち、幹は地面に大してほぼ垂直にのびていくのが普通である。しかし、樹木の中にはこうしたものと少し異なる生長形態を示すものがある。中国地方にある大山の山頂付近にみられるダイセンキャラボクの場合がそうしたものの一つである。ダイセンキャラボクの老大木の幹は上方にのびていくというより横に匍匐しながらのびていく性質があり、このことがダイセンキャラボクを通常の樹木の個体概念と少し異なったものになっている。

我国で老大木といわれているものの中には、個体の定義の不明瞭なものがあり、そのため伝えられている樹令に疑問なものがみられる。

* 鳥取大学農学部 農林総合科学科 森林生産学講座

Department of Forestry Science, Faculty of Agriculture, Tottori University

ダイセンキャラボクの老木木の場合はこれまで報告¹⁾したものと少し異なる個体問題、樹令問題がみとめられ、本報ではこうした点について報告する。

II 調査方法

枝幹の生長の匍匐性に関連した老木木の主なものは次のようである。

1. 鳥取県大山町：大山山頂付近のダイセンキャラボク
2. 同上：大山寺のダイセンキャラボク
3. 鳥取県日南町：船通山のイチイ

これら老木木の匍匐生長について、肉眼的観察とともに写真撮影によって調査し分析した。

III 結果と考察

中国地方にある大山は標高1711mで、その山頂付近には特別天然記念物であるダイセンキャラボクの群落がある(写真1)。このダイセンキャラボクはイチイ科に属し、イチイの変種とされている。イチイの方は高木で樹高が20mに達することがあるのに対して、ここでみられるダイセンキャラボクの樹高は1m～2mにすぎない。しかし、このダイセンキャラボクの場合、幹の生長は匍匐性を持ち、地表又は地中をはうようにしてのびていく性質をもっている(写真2, 3, 4, 5)。

幹は匍匐しながら分岐し、地面に接したところや地中に埋ぼつしたところで根を形成していることが多い(写真6, 7)。匍匐しながら地中に埋ぼつしていた幹が再び地面に出る場合、それがあたかも一本の独立した樹木であるかのようにみえることがある(写真8, 9)。外見上1本の独立した樹木のようにみえても掘ってみると埋ぼつしている幹でつながっていることがある(写真10, 11)。すなわち、匍匐しながら地中に埋ぼつしていた幹が地表にで、しかも、その付近で地下茎が形成されている場合特に独立した樹木にみえるのである。

このように匍匐しながら分岐し、生長を続けていたため、その生育範囲は広くなり、老木木の中



写真1 鳥取県大山町大山
ダイセンキャラボク群落



写真2 鳥取県大山町大山
ダイセンキャラボク
(幹の地表匍匐)



写真3 鳥取県大山町大山
ダイセンキョラボク
(幹の地表匍匐)



写真4 鳥取県大山町大山
ダイセンキョラボク
(幹の半地中匍匐)



写真5 鳥取県大山町大山
ダイセンキョラボク
(幹の地中匍匐)



写真6 鳥取県大山町大山
ダイセンキョラボク
(匍匐幹の発根)



写真7 鳥取県大山町大山
ダイセンキョラボク
(匍匐幹の発根)



写真8 鳥取県大山町大山
ダイセンキョラボク
(地表に出た枝幹)



写真9 鳥取県大山町大山
ダイセンキヤラボク
(地表に出た枝幹)



写真10 鳥取県大山町大山
ダイセンキヤラボク
(幹による連絡)



写真11 鳥取県大山町大山
ダイセンキヤラボク
(幹による連絡)



写真12 日南町船通山
船通山のイチイ

には一つの幹から分岐したものが数百アールに達するものがあるといわれている。これと同じような匍匐性をもつものとして、近くの船通山の山頂付近にみられる「船通山のイチイ」がある。

しかし、その樹令が2000年といわれているわりには匍匐の範囲はそれほど広いものでない(写真12)。このように、幹が地表や地中を匍匐しながら分岐し、ところどころで発根し、その部分では独立した状態をつくりながら広範囲にわたって生育しているものは、はたして一つの個体とみなしてよいか疑問である。これらは、通常みられる樹木の個体としての樹形と著しく異なっており、無性生殖による個体の集団もしくは群体的個体といった性格をもっている。

ダイセンキヤラボクの老大木の中には、主幹が完全に枯死してしまっているにもかかわらず先端部はいぜんとして生育を続けていることがある(写真13, 14, 15, 16)。又、地中に埋ぼつしていた幹が道などで露出し枯死していたり、または切断されている場合でも枯死部や切断部をはさんだ両方

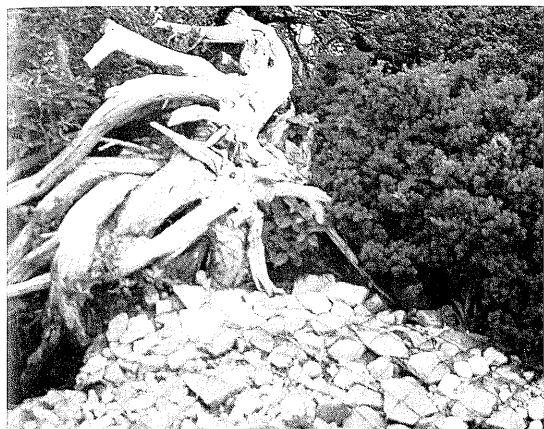


写真13 鳥取県大山町大山
ダイセンキャラボク
(主幹の枯死)



写真14 鳥取県大山町大山
ダイセンキャラボク
(匍匐幹の枯死)



写真15 鳥取県大山町大山
ダイセンキャラボク
(枯死幹の先端部)



写真16 鳥取県大山町大山
ダイセンキャラボク
(枯死幹の先端部)



写真17 鳥取県大山町大山
ダイセンキャラボク
(幹の中途での切断部)



写真18 鳥取県大山町大山
ダイセンキャラボク
(切断幹の先端部の発根)



写真19 鳥取県大山町大山
ダイセンキョロボク
(匍匐の中途の枯死と両端の先存部)



写真20 鳥取県大山町大山
ダイセンキョロボク
(枯死幹の先端部の先存部)

では生育を続けていることがある（写真17,18,19,20）。これは、主幹又は幹の中途が枯死や切断によって幹としての機能を失った場合でも、それ以外のところでは地下茎が形成されているため生育を続けることができるのである。

主幹が完全に枯死し先端部のみが生育している場合、この先端部はすでに枯死してしまったかつての主幹と同じ個体とみなしてよいものだろうか。また、その樹令はすでに枯死した主幹を基準にして決め手よいものだろうか。

我国にみられる老大木の中には、個体としての定義のあいまいさが原因して、その樹令が伝えられている通りかどうか疑問なものも少なくない。例えば、主幹がとっくに枯死して存在しないが、のちにその地下茎から周辺に不定枝が発生し、それが現在の幹となっている場でも、すでに枯死して存在しないかつての主幹と同じ個体とみなし、樹令もかつての主幹の年令を基準にして決められていることがある。

竹は同じ地下茎から次々と芽を形成し、地上部でいわゆる竹となっていく²⁾。この場合は地上部の竹の集団はクローンとしては同じものであっても個体としてはそれぞれ別のものとされている。すなわち、同じ地下茎から発生したからといって同じ個体とはみなされていない。

老大木の場合も、たとえ同じ地下茎から発生したものであっても、それが新しい枝幹葉根を形成して独立した状態にある場合は新しい個体の形成とみなすべきとした¹⁾。

ダイセンキョロボクの老大木のように、1つの幹が地表面や地中を匍匐しながら分岐し、ところどころで地下茎を形成していくものでは、その部分がほぼ独立した枝幹根をもつものについては、新しい個体の形成とみなした方がよいと考える。

このような考え方にたつならば、主幹がすでに枯死して先端部のみが存在し、しかも独立したような枝幹葉根が形成されているならば、この先端部は枯死したかつての主幹とは別の個体であり、その樹令も枯死した主幹とは関係なく、先端部の年令を基準にして決めていくべきである。

IV 要 旨

ダイセンキヤラボクの老大木の幹は、地表又は地中を匍匐しながらのび、分岐し、ところどころで地下茎を形成しながら生育しているものが多い。こうしたものの中には主幹がすでに枯死しているが先端部の方が枝幹葉根が発達して独立した状態で生育をつづけているものがある。

このような場合は、この先端部は枯死してしまったかつての主幹とは別の新しい個体とみなすべきで、その樹令も枯死した主幹とは関係なく先端部の年令をもとに決めていくべきである。

文 献

- 1) 小笠原隆三：老大木に関する研究(III)－樹令問題－広葉樹研究 6, pp. 111～121 (1991)
- 2) 上田弘一郎：竹と日本人 日本放送協会 東京 pp. 1～929 (1976)